

# 日本男子論

福沢諭吉

青空文庫



明治十八年夏の頃、『時事新報』に「日本婦人論」と題して、

婦人の身は男子と同等たるべし、夫婦家いえに居て、男子のみ独り快樂もつぱを専らにし独り威張るべきにあらず云々うんぬんの旨を記しして、数日の社説に掲げ、また十九年五月の『時事新報』「男女交際論」には、男女両性の間は肉交のみにあらず、別に情交の大切なるものあれば、両性の交際自由自在なるべき道理を陳のべたるに、世上に反対論も少なくして鄙見ひけんの行われたるは、記者の喜ぶ所なれども、右の「婦人論」なり、また「交際論」なり、いずれも婦人の方を本もとにして論を立てたるものにして、今の婦人の有様を憐あわれみ、何とかして少しにてもその地位の高まるようにと思う一片の婆心ぼしんよ

り筆を下したるが故に、その筆法は常に婦人の氣を引き立つるの勢いを催して、男子の方に筆の鋒の向かわざりしは些と不都合にして、これを譬えば、ここに高きものと低きものと二様ありて、いづれも程好き中を得ざるゆえ、これを矯め直さんとして、ひたすらその低きものを助け、いかようにもしてこれを高くせんとして、ただ一方に苦心するのみにして、他の一方の高きに過ぐるものを低くせんとするの手段に力を尽さざりしもの如し。物の低きに過ぐるは固より宜しからずといえども、これを高くして高きに過ぐるに至るが如きは、むしろ初めのままに捨て置くに若かず。故に他の一方について高きものを低くせんとするの工風は随分難き事なれども、これを行つて失策なかるべきが故に、この一編の文

においては、かの男子の高き頭を取つて押さえて低くし、自然に男女両性の釣合をして程好き中を得せしめんと、の腹案を以て筆を立て、「日本男子論」と題したるものなり。

世に道徳論者ありて、日本国に道徳の根本標準を立てんなど喧しく議論して、あるいは儒道に由らんといい、あるいは仏法に従わんといい、あるいは耶蘇教を用いんというものあれば、また一方にはこれを悦ばず、儒仏耶蘇、いずれにてもこれに偏するは不便なり、つまり自愛に溺れず、博愛に流れず、まさにその中道を得たる一種の徳教を作らんとするものあり。これらの言を聞けば一応はもつとも至極にして、道徳論に相違はなけれども、その目的とする所、ややもすれば自身に切ならずして他に關係するもの

の如し。一身の私徳を後にして、交際上の公德を先にするもの  
如し。即ち家に居るの徳義よりも、世に処するの徳義を専らにす  
るものの如し。この一点において我輩が見る所を異にすると申す  
その次第は、敢えて論者の道德論を非難するにはあらざれども、  
前後緩急の別について問う所のものなきを得ざるなり。

世界開闢の歴史を見るに、初めは独化の一人ありて、後

に男女夫婦を生じたりという。我が日本において、くにのとこたちのみ国常立

こと尊の如きは独化の神にして、伊奘諾尊、伊奘冊尊は則

ち夫婦の神なり。西洋においても、先ずエデンの園に現われたる  
人はアダムにして、後にイブなる女性を生じ、夫婦の道始めて  
行われたるものなり。さてこの独化どっかどくせい独生いの人が独り天地の間に

居るときに当たりては、固より道德の要あるべからず。あるいは  
 謹んで天に事うるなどのこともあらんなれども、これは神学の言  
 にして、我輩が通俗の意味に用うる道德は、これを修めんとして  
 修むべからず、これを破らんとして破るべからず、徳もなく不徳  
 もなき有様なれども、後にここに配偶を生じ、男女二人相伴うて  
 同居するに至り、始めて道德の要用を見出したり。その相伴うや、  
 相共に親愛し、相共に尊敬し、互いに助け、助けられ、二人あた  
 かも一身同体にして、その間に少しも私の意を挟むべからず。即  
 ち男女居を同じうするための要用にして、これを夫婦の徳義とい  
 う。もしも然らずして、相互に疎んじ相互に怨んでその情を  
 痛ましむるが如きありては、配偶の大倫を全うすること能わず

して、これをその人の不徳と名づけざるを得ず。我輩<sup>ひそ</sup>窃かに案ずるに、かの伊奘諾尊、伊奘冊尊、またはアダム、イーブの如きも、必ずこの夫婦の徳義を修めて幸福円満なりしことならんと信ずるのみ。

されば人生の道德は夫婦の間に始まり、夫婦以前道德なく、夫婦以後始めてその要を感じることなれば、これを百徳の根本なりと明言して決して争うべからざるものなり。既に夫婦を成してここに子あり、始めて親子・兄弟姉妹の關係を生じ、おのおのその關係について要用の徳義あり。慈といい、孝といい、悌<sup>てい</sup>といい、友<sup>ゆう</sup>というが如き、即ちこれにして、これを総称して人生居家<sup>きよか</sup>の徳義と名づくといえども、その根本は夫婦の徳に由<sup>よ</sup>らざるはなし。

如何いかんとなれば、夫婦すて既に配偶の大倫を紊みだりて先ず不徳の家を成すときは、この家に他の徳義の発生すべき道理あらざればなり。近く有形のものについて確かなる証拠を示さんに、両親の身体に病あればその病毒は必ず子孫に遺伝するを常とす、人の普あまねく知る所にして、夫婦の病は家族百病の根本なりといわざるを得ず。有形の病毒にして斯かくの如くなれば、無形の徳義においてもまた斯の如くなるべきは、誠みやすに睹易みやすき道理にして、これに疑いを容いる者はなかるべし。病身なる父母は健康なる児を生まず、不徳の家には有徳なる子女を見ず。有形無形その道理は一なり。あるいは夫婦不徳の家に孝行の子女を生じ、兄弟姉妹だんらん団むつまじきこともあらば、これは不思議の間違まれいにして、稀まれに人間世界にある

も、常に然るしかを冀望きぼうすべからざる所のものなり。世間あるいは強いてこれを望む者もあるべしといえども、その迂闊うかつなるは病父母をして健康無事の子を生ましめんとするに異ならず、我輩の知らざる所なり。古人の言に孝は百ひゃつこう行の本もとなりという。孝行は人生の徳義の中にて至極大切なものにして、我輩も固もとより重んずる所のものなりといえども、世界開闢せいせい生々せいせいの順序においても、先ず夫婦を成して然る後に親子あることなれば、孝徳は第二に起こりたるものにして、これに先だつに夫婦の徳義あるを忘るべからず。故に今仮かりに古人の言に従つて孝を百行の本とするも、その孝徳を発生せしむるの根本は、夫婦の徳心に胚胎はいたいするものといわざるを得ず。男女の關係は人生に至大しだい至重しちようの事なり。

夫婦家いえに居て親子・兄弟姉妹の關係を生じ、その關係について徳義の要用を感じ、家族おのおのこれを修めて一家の幸福いよいよ円満いよいよ樂し。即ち居家きよかの道德なれども、人間生せいせい々の約束は一家族に止とどまらず、子々孫々次第に繁殖すれば、その起源は一對の夫婦いすに出るといへども、幾百千年を經ふるの間には遂に一社会を成すに至るべし。既に社会を成すときは、朋友の關係あり、老少の關係あり、また社会の群集を始末するには政府なかるべからざるが故に、政府と人民との關係を生じ、その仕組みには君臣の分を定むるもあり、あるいは君臣の名なきもあれども、つまり治むる者と治めらるる者との關係にして、その意味は大同小異のみ。斯かく広き社会の中に居て、一人と一人との間、また一種

族と一種族との間に様々の關係あることなれば、その關係について、それぞれ守る所の徳義なかるべからず。即ち朋友に信といい、長幼に序といい、君臣または治者・被治者の間に義というが如く、大切なる箇条あり。これを人生戸外こがいの道德という。即ち家の外の道德という義にして、家族に縁なく、広く社会の人に交わるに要用なるものにして、かの居家の道德に比すれば、その働くところを異にするが故に、その重んずる所もまた自おのずから相異あいことならざるを得ず。

例えば私有の権というが如きは、戸外において最も大切なる箇条にして、これを犯すものは不徳のみならず、冷淡無情なる法律においても深く咎とがむる所なれども、一步を引いて家の内に入れば

甚だ寛ゆるやかにして、夫婦親子の間に私有を争うものも少なし。家内には情を重んじて家族相互に優しきを貴たつとぶのみにして、時として過あやまり誤しくじり失策もあり、または礼を欠くことあるもこれを咎めずといえども、戸外にあつては過誤も容易に許されず、まして無礼の如きは、他の榮譽を害するの不徳として、世間の譏そしりを免まぬかべからず。これを要するに、戸外の徳は道理を主とし、家内の徳は人情を主とするものなりというて可ならん。即ち公德私徳の名ある所以ゆえんにして、その分ぶん界かい明白なれば、これを教うるの法においてもまた前後本末の区別なかるべからざるなり。

例えば支那流に道德の文字を並べ、親愛、恭敬、孝悌、忠信、礼義、廉潔、正直など記して、その公私の分界を吟味すれば、親

愛、恭敬、孝悌は、私徳の誠なるものにして、忠信、礼義、廉潔、正直は、公德の部に属すべし。けだし忠信以下の箇条も固もとより家内に行わるるといへども、あたかも親愛、恭敬、孝悌の空気の中に包羅ほうらせられて特ことに形を現わすを得ず。その行わるるや不規則なるが如くにして、ただ精神を誠の一点に存し、以て幸福円満欠くることなきを得るのみ。然しかるに戸外の公德は、ややもすれば道理に入ること多くして、冷淡無情に陥らんとするの弊なきにあらず。最も憂うべき所にして、ある人の説に十全の正直は十全の親愛と両立すべからずといひしも、この辺の事情を極言したるものならん。古今の道徳論者が世人の薄はく徳とくを歎き、未だ誠に至らずなど言うは、その言げん不分明にして徳の公私を分かつたずといへども、意

のある所を窺<sup>うかが</sup>えば、公德の働きに情を含むこと未だ足らずして、私徳の円満なるが如くならずというの意味を見るべし。されば今、公德の美を求めんとならば、先ず私徳を修めて人情を厚うし、誠意誠心を発達せしめ、以て公德の根本を固くするの工風<sup>くふう</sup>こそ最<sup>さいだ</sup>第一<sup>いいち</sup>の肝要なれ。即ち家に居<sup>お</sup>り家族相互いに親愛恭敬して人生の至情を尽し、一言一行、誠のほかなくしてその習慣を成し、発して戸外の働きに現われて公德の美を円満ならしむるものなり。古人の言に、忠臣は孝子の門に出<sup>い</sup>ずといいしも、決して偶然にあらず。忠は公德にして孝は私徳なり、その私<sup>し</sup>、修まるときは、この公<sup>こう</sup>、美ならざらんと欲するも得<sup>う</sup>べからざるなり。

然<sup>しか</sup>るに我輩が古今和漢の道德論者に向かつて不平なるは、その

教えの主義として第一に私徳公德の區別を立てざるにあり。第二には、たと仮令え不言の間におの自ずから區別する所ありとするも、その教えの方法に前後本末を明言せずして、時としては私徳を説き、また時としては公德を勧め、いずれか前、いずれか後なるを明らかにせざるがために、後進の学者をして方向を誤らしむるにあり。然かのみならず、その教えの主義たるや、ややもすれば政治論に混同して重きを政治に置き、これに関する徳義は固より公德もとなるが故に、かえつて私徳を後にして公德を先にするものさえなきにあらず。例えば忠義正直というが如き、政治上の美德にして、甚だ大切なるものなれども、人に教うるに先ずこの公德を以てして、居家の私徳を等なおよ閑さりにするにおいては、あたかも根本の浅き公德

にして、我輩は時にその動揺なきを保証する能わざるものなり。

そもそも一国の社会を維持して繁栄幸福を求めんとするには、その社会の公衆に公德なかるべからず。その公德をして堅固ならしめんとするには、根本を私徳の発育に取らざるべからず。即ち国の本は家にあり。良家の集まる者は良国にして、国力の由よつて以て発生する源は、単に家にあつて存すること、更に疑うべきにあらず。然しかり而してその家の私徳なるものは、親子・兄弟姉妹、だんらん 団欒として相親しみ、父母は慈愛厚くして子は孝心深く、兄弟姉妹相助けて以て父母の心身の労を軽くする等の箇条にして、能よくこの私徳を發達せしむるその原因は、家族の起源たる夫婦の間に薰くんずる親愛恭敬の美にあらざるはなし。

およそ古今世界に親子不和といひ兄弟姉妹相争うというが如き  
 不祥の沙汰さた少なからずして、当局者の罪に相違はなけれども、一  
 歩を進めて事の原因を尋ぬれば、その父母たる者が夫婦の關係を  
 等閑なおよにしたるにあり。なお進んで吟味を遠くすれば、その父母  
 の父母たる祖父母より以上曾祖そうそ祖げんそに至るまでも罪を免るべから  
 ず。前節にもいえる如く、人の心の不徳は身の病に異ならず、病  
 毒の力能よく四、五世に遺伝するものなれば、不徳の力もまた四、  
 五世に伝えて禍わざわいせざるを得ず。されば公徳の根本は一家の私徳に  
 ありて、その私徳の元素は夫婦の間に胚はい胎たいすること明々白々、  
 我輩の敢あえて保証する所のものなれば、男女両性の關係は立国の  
 大本、禍福の起源として更に争うべからず。今日吾々日本国民の

形体は、伊奘諾・伊奘冊にそん二尊の遺体にして、吾々の依よつて以もつて社會を維持する私徳公徳もまた、その起源を求むれば、二尊夫婦の間に行われたる親愛恭敬の遺徳なりと知るべし。

夫婦親愛恭敬の徳は、天下万世百徳の大本たいほんにして更に争うべからざるの次第ぜんは、前既にその大意しるを記して、読者においても必ず異議はなかるべし。そもそも我輩がここに敬の字を用いたるは偶然にあらず。男女肉体を以て相接あいせつするものなれば、仮令たとえいかなる夫婦にても一時の親愛なきを得ず。動物たる人類の情において然しかりといえども、人類をして他の動物の上に位くらして万物の靈たらしむる所以ゆえんのものは、この親愛に兼ねて恭敬の誠あるに由よるのみ。これを通俗にいえば、夫婦の間、相互いに隔てなくして可愛

がるとまでにては未だ禽獸と區別するに足らず。一步を進め、夫婦互いに丁寧にし大事にするというて、始めて人の人たる所を見るに足るべし。即ち敬の意なり。

然らば即ち敬愛は夫婦の徳にして、この徳義を修めてこれを今日の実際に施すの法如何いかにと尋ぬるに、夫婦利害を共にし苦樂喜憂を共にするは勿論、あるいは一方の心身に苦痛の落ち来るきたこともあれば、人力の届く限りはその苦痛を分担するの工風くふうを運めぐらさざるべからず。いわんや己れの欲せざる所を他の一方に施すにおいてをや。ゆめゆめあるまじき事にして、徹頭徹尾、恕じよの一義を忘れず、形体からだこそ二個ふたりに分かれたれども、その実は一身同体と心得て、始めて夫婦の人倫を全うするを得べし。故に夫婦家に居おるは

人間の幸福快樂なりというといえども、本来この夫婦は二個の他人の相合あいおうたるものにして、その心はともかくも、身の有ありさま様の同じかるべきにあらず。夫婦おのおのその親戚を異ことにし、その朋友を異にし、これらに關係する喜憂は一方の知らざる所なれども、既に一身同体とあれば、その喜憂を分かたざるを得ず。また平へいぜ生の衣食住についても、おのおの好悪こうおする所なきを期すべからずといえども、互いに忍んでその好悪に従わざるべからず。またあるいは一方の病氣の如き、固もとより他の一方に痛痒つうようなけれども、あたかもその病苦を自分の身に引受くるが如くして、力のあらん限りにこれを看護せざるべからず。良りようじん人五年の中風ちゆうふうしやう症、死に至るまで看護怠らずといひ、内ないくん君七年のレウマチスに、主

人は家業の傍らかたわに自ら薬餌やくじを進め、これがために遂に資産をも傾けたるの例なきにあらず。

これらの点より見れば、夫婦同室は決して面白きものにあらず。独身なれば、親戚朋友の附つきあい合もただ一方にして余計の心配なく、衣食住の物とて自分一人ひとりの氣に任せて不自由なく、病氣も一身の病氣にして他人の病を憂うるに及ばざるに、ただ夫婦の約束したるがために、あたかも一生の苦勞を二重にしたる姿となり、一人にして二人前の勤めを勤むるの責せめに当たるは不利益なるが如くなれども、およそ人間世界において損益苦樂は常に相伴あひまうの約束にして、俗にいわゆる丸儲まるもうけなるものはなきはずなり。故に夫婦家に居て互いに苦勞を共にするは、一方において二重の苦勞に似

たれども、その苦勞の代りには一人の快樂を二人の間に共にして、即ち二重の快樂なれば、つまり損亡そんもうとしてはなくして苦樂相償あひぐのい、平均してなお余樂よらくあるものと知るべし。

されば夫婦家に居おるは必ずしも常に快樂のみに浴すべきものに  
あらず、苦樂相平均して幸いに余樂を楽しむものなれども、榮枯  
無常の人間世界に居れば、不幸にしてただ苦勞にのみ苦しむこと  
もあるべき約束なりと覺悟を定めて、さて一夫多妻、一婦多男ただんは、  
果たして天理に叶かなうか、果たして人事の要用、臨時の便利にして  
害なきものかと尋ぬるに、我輩は断じて否いなと答えざるを得ず。天  
の人生ざるや男女同数にして、この人類は元もと一對の夫婦より繁  
殖したるものなれば、生々せいせいの起原に訴うるも、今の人口の割合

に問うも、多妻多男は許すべからず。然らば人事の要用、臨時の便利において如何いかにというに、人間世界の歳月を短きものとし、人生を一代限りのものとし、あたかも今日の世界を挙げて今日の人に玩がんろう弄せしめて遺憾なしとすれば、多妻多男の要用便利もあるべし。世事繁多せじはんたなれば一時夫婦の離れ居ることもあり、また時としては病気災難等の事も少なからず。これらの時に当たつては夫婦一対に限らず、一夫衆しゅうふ婦ふに接し、一婦衆しゅうだん男だんに交わるも、木石ぼくせきならざる人情の要用にして、臨時非常の便利なるべしといえども、これは人生に苦楽相伴うの情態を知らずして、快樂の一方に着眼し、いわゆる丸儲けを取らんとする自利の偏見にして、今の社会を害するのみならず、また後世のために謀はかりて許すべか

らざる所のものなり。

男女にして一度ひとたびこれを犯すときは、既に夫婦の大倫を破り、恕じよの道を忘れて情を痛ましめたるものにして、敬愛の誠はこの時限りに断絶せざるを得ず。仮令たとえあるいは種々様々の事情によりて外面の美を装うことなきにあらずといえども、一点の瑕瑾かきん、以て全璧ぜんぺきの光を害して家内の明めいを失い、禍根ひとた一度び生じて、発しては親子の不和となり、変じては兄弟姉妹の争いとなり、なお天下後世を謀れば、一家の不徳は子々孫々と共に繁殖して、遂に社会公德の根本を薄弱ならしむるに至るべし。故に云いわく、多妻多男の法は今世こんせいを挙げて今人こんじんの玩弄物がんろうぶつに供するの覚悟なれば可なりといえども、天下を万々歳の天下として今人をして後世に責

任あらしめんとするときは、我輩は一時の要用便利を以て天下後世の大事に易<sup>か</sup>うること能わざる者なり。

男女両性の関係は至大至重のものにして、夫婦同室の約束を結ぶときは、これを人の大倫と称し、社会百福の基<sup>もと</sup>、また百不幸の源たるの理由は、前に陳<sup>の</sup>べたる所を以て既に明白なりとして、さて古今世界の実際において、両性のいずれかこの関係を等<sup>なおよ</sup>閑にして大倫を破るもの多きやと尋ぬれば、常に男性にありと答えざるを得ず。西洋文明の諸国においても皆然<sup>しか</sup>らざるはなきその中について、日本の如きは最も甚だしきものにして、古来の習俗、一男多妻を禁ぜざるの事実を見ても、大概を窺<sup>うか</sup>い見るべし。西洋文明国の男女は果たして潔<sup>けっせい</sup>清なりやというに、決して然らず、

極端について見れば不潔の甚だしきもの多しといえども、その不潔を不潔としてこれを悪み賤しむの情は日本人よりも甚だしくして、輿論よろんの嚴重なることはとても日本国の比にあらず。故に、かの国々の男子が不品行を犯すは、初めよりその不品行なるを知り、あたかも輿論に敵して窃ひそかにこれを犯すことなれば、その事はすべて人間の大秘密に属して、言う者もなく聞く者もなく、事実の有無にかかわらず外面の美風だけはこれを維持してなお未だ破壊に至らずといえども、不幸なるは我が日本国の旧習俗にして、事の起源は今日、得て詳つまびらかにするに由よしなしといえども、古来家の血統を重んずるの国風にして、嗣し子なく家名の断絶する法律さえ行われたるほどの次第にて、頻しきりに子を生むの要用を感じ、その

目的を達するには多妻法より便利なるものなきが故に、ここにおいてか妾しよやしなを畜うの風を成したるものの如し。天理の議論などはともかくも、家名を重んずるの習俗に制せられて、止むやを得ず妾を畜うの場合に至りしは無理もなきことにして、またこれ一国の主義として恕じよすべきに似たれども、天下後世これより生ずる所の弊害は、実に筆紙ひつしにも尽し難きものあり。

さなきだに人類の情慾おのは自ずから禁じ難きものなるに、ここに幸いにも子孫相続云々の一主義あることなれば、この義おしひろを拈ひめていかなる事か行わるべからざらんや。妻を離別しよするも可なり、妾しよを畜やしなうも可なり、一妾にして足らざれば二妾も可なり、二妾三妾を畜やしなうも可なり、人事の変遷、長

き歲月をふ経る間には、子孫相続の主義はただに口実として用いらるのみならず、早く既にその主義をも忘却し、一男にして衆婦人に接するは、あたかも男子に授けられたる特典の姿となり、以て人倫不取締の今日に至りしは、国民一家の不幸に止とどまらず、その禍は引いて天下に及わぼし、一家の私徳先まず紊みだれて社会交際の公德を害し、立国の大本たいほん、動揺せざらんと欲するも得うべからず。故に今日の日本男子にして内行ないこうの修まらざる者は、単に自家子孫の罪人のみにあらず、社会中の一人として、今の天下に対しまた後世に対して、その罪免まぬかるべからざるものなり。

主人の内行ないこう修まらざるがために、一家内に様々の風波を起こして家人の情を痛ましめ、以てその私徳の発達を妨げ、不孝の子

を生じ、不悌不友ふていふゆうの兄弟姉妹を作るは、固もとより免るべからざるの結果にして、怪しむに足らざる所なれども、ここに最も憐あわれむべきは、家に男尊女卑の悪習を醸かもして、子孫に压制卑屈の根性を成さしむるの一事なり。男子の不品行は既に一般の習慣となりて、人の怪しむ者なしというといえども、人類天性の本心において、自ら犯すその不品行を人間の美事びじとして誇る者はあるべからず。否いな百人は百人、千人は千人、皆これを心の底に愧はじざるものなし。内心にこれを愧じて外面に傲慢なる色を装らい、磊落らいらくなるが如く無頓着なるが如くにして、強いて自ら慰むるのみなれども、俗にいわゆる疵持きずつ身にして、常に悠々として安心するを得ず。その家人と共に一家に眠食して団欒たる最中にも、時として禁句に触

れらることあれば、その時の不愉快は譬えんに物なし。無心の  
 小児が父を共にして母を異にするの理由を問ひ、隣家には父母二  
 人に限りて吾が家に一父二、三母あるは如何などと、不審を起こ  
 して詰問に及ぶときは、さすが鉄面皮の乃父も答うるに辞なく、  
 ただ黙して冷笑するか顧みて他を言うのほかなし。即ちその身の  
 弱点にして、小児の一言、寸鉄腸を断つものなり。既にこの弱点  
 あれば常にこれを防禦するの工風なかるべからず。その策如何と  
 いうに、朝夕主人の言行を嚴重正格にして、家人を視ること  
 他人の如くし、妻妾兒孫をして己れに事うること奴隸の主君にお  
 けるが如くならしめ、あたかも一家の至尊には近づくべからず、  
 その忌諱には触るべからず、俗にいえば殿様旦那様の御機嫌は損

ずべからずとして、上下尊卑の分を明らかにし、例の内行禁句の一事に至りては、言の端にもこれをいわずして、家内、目を以てするの家風を養成すること最も必要にして、この一策は取りも直さず内行防禦の胸壁とも称すべきものなり。

およそ人事に必要なものは特に求めずして成るの常にして、かの内行不始末の防禦策の如きも、誰が家の主人がいずれの時にこれを発明して実行の先例を示したりなどいふべき跡はなけれども、今日の実際について見れば、主人の内行修まらざる者は、その家風の外面は必ず嚴重にして、家族骨肉の間、自然に他人の交際の如く、何か互いに隠して打ち解けざるものあるが如し。あるいはまた、家道紊れて取締なく、親子妻妾相互に無遠慮狼藉

なるが如きものにて、その主人は必ず特に短氣無法にして、家人に恐れられざるはなし。即ち事の要用に出でたるものにして、いやしくも家風に厳格を失うか、もしくは主人に短氣無法の威力なきに於いては、かの不品行の弱点を襲わるるの恐れあればなり。世間の噂うわさに、某家の主人は内行に頓着せずして家事を軽んじ、あるいは妻妾一処に居て甚だ不都合なれども、内君は貞実にして主公は公平、妾もまた至極しごく柔順なる者にして、かつて家に風波を生じたることなしなどいう者あれども、これはただ外見外聞の噂のみ。即ちその風波の生ぜざるは、ただ家法の嚴にして主公の威張るがためにして、これを形容していえば、压制政府の下に騒乱なきものに異ならず。ただ表に破裂せざるのみ。その内実は風波の

動揺を互いの胸中に含むものというべし。されば、男尊女卑、主公压制、家人卑屈の組織は、不品行の家に欠くべからざるの要用にして、日々にちにちやや夜々、後進の子女をこの組織の中に養育することなれば、その子女後年の事もまた想い見るべし。我輩の特に憐れむ所のものなり。天下広し家族多しといえども、一家の夫婦・親子・兄弟姉妹、相互いに親愛恭敬して至情を尽し、陰にも陽にも隠す所なくして互いにその幸福を祈り、無礼の間に敬意を表し、争うが如くにして相譲りあいゆず、家の貧富に論なく万年の和氣悠々として春の如くなるものは、不品行の家に求むべからざるの幸福なりと知るべし。

君子の世に処するには、自ら信じ自ら重んずる所のものなかる

べからず。即ち自身の他に擢ぬんで他人の得て我に及ばざる所のものを恃たのみにするの謂いにして、あるいは才学の拔群はくぐんなるあり、あるいは資産の非常なるあり、皆以て身の重きを成して自信自重の資たすけたるべきものなれども、就な中私徳の盛んにしていわゆる屋お漏くろうに恥じざるの一義は最も恃たのむべきものにして、能よくその徳義を脩おめて家内に恥おずることなく戸外はに憚おる所なき者は、貧富・才不才に論なく、その身の重きを知つて自ら信ぜざるはなし。これを君子の身の位くらいという。洋語にいうヂグニチーなるもの、これなり。そもそも人の私徳を脩むる者は、何なに故ゆえに自信自重の氣象を生じて、自ら天下の高所に居おるやと尋ぬるに、能よく難かたきを忍んで他人の能よくせざる所を能くするが故なり。例えば読書生が徹夜勉

強すれば、その学芸の進歩如何にかかわらず、ただその勉強の一  
 事のみを以て自ら信じ自ら重んずるに足るべし。寺の僧侶が毎  
 朝早起、経を誦し粗衣粗食して寒暑の苦しみをも憚らざれば、  
 その事は直ちに世の利害に係せざるも、本人の精神は、ただそ  
 の艱苦に当たるのみを以て凡俗を目下に見下すの氣位を生ずべし。  
 天下の人皆財を貪るその中に居て独り寡慾なるが如き、詐偽の行  
 わるる社会に独り正直なるが如き、輕薄無情の浮世に独り深切  
 なるが如き、いづれも皆拔群の嗜みにして、自信自重の元素たら  
 ざるはなし。如何となれば、書生の勉強、僧侶の眠食は身体の苦  
 痛にして、寡慾、正直、深切の如きは精神の忍耐、即ち一方より  
 いえばその苦痛なればなり。

されば私徳を大切にするその中についても、両性の交際を厳に  
 して徹頭徹尾けっせい清の節を守り、俯仰ふぎよう天地に愧はずることなから  
 んとするには、人生甚だ長くしてその間に千種万様の事情あるに  
 もかかわらず、自ら血気を抑えて時としては人の顔がんしよく色をも犯  
 し、世を挙こぞつて皆酔うの最中、独り自ら醒さめ、独行勇進して左右  
 を顧みくせきざることなれば、随分容易なる脩しゆぎよう業にあらず。即ち木ぼ  
おさ石くせきならざる人生の難業ともいうべきものにして、既にこの業を  
 脩おさめて顧みて凡俗世界を見れば、腐敗の空気充滿して醜に堪えず。  
 無知無徳の下等社会はともかくも、上流の富貴ふうきまたは学者と称す  
 る部分においても、言うに忍びあざるもの多し。人間の大事、社会  
 の体面のためと思えばこそ、敢あえてこれを明言する者なければども、

その実は万物の霊たるを忘れて単に獸慾の奴隷たる者さえなきに  
あらず。

いやしくも潔けつせい清むく無垢くらの位らいに居おり、この腐敗したる醜世界を臨のぞ  
み見て、自ら自身を区別するの心を生ぜざるものあらんや。僅わずか  
に資産の厚薄、才学の深淺を以てなおかつ他と伍ごをなすを屑いさぎよしと  
せず。いわんや人倫の大本、百徳の源たる男女の關係につき、潔  
不潔こことを殊ことにするにおいてをや。他の醜物を眼下みに視ることなから  
んと欲するも得うべからず。即ち我が精神を自信自重の高処に進め  
たるものにして、精神ひとた一度ひとたび定まるときは、その働はたらきはただ人倫  
の区域のみに止とどまらず、発しては社会交際の運動となり、言語応  
対の風采となり、浩こうぜん然ぜんの氣き外あふに溢あふれて、身外の万物恐るるに足

るものなし。談笑洒落・進退自由にして縦横憚る所なきが如く  
 なれども、その間に一点の汚痕を留めず、余裕綽々然とし  
 て人の情を痛ましむることなし。けだし潔清無垢の極はかえつて  
 無量の寛大となり、浮世の百汚穢を容れて妨げなきものならん  
 のみ。これを、かの世間の醜行男子が、社会の陰処に独り醜を  
 恣にするにあらざれば同類一場の交際を開き、豪遊と名づけ愉快  
 と稱し、沈湎冒色勝手次第に飛揚して得々たるも、不幸  
 にして君子の耳目に触るときは、疵持つ身の忽ち萎縮して顔色  
 を失い、人の後に瞠若として卑屈慚愧の状を呈すること、日  
 光に当てられたる土鼠の如くなるものに比すれば、また同日の論  
 にあらざるなり。

近來世間にいわゆる文明開化の進歩と共に學術技芸もまた進歩して、後進の社会に人物を出し、また故老の部分においても随分開明説を悦んで、その主義を事に施さんとする者あるは祝すべきに似たれども、開明の進歩と共に内行の不取締もまた同時に進歩し、この輩が不文野蠻と称して常に慙笑する所の封建時代にありても、決して許されざりし不品行を今日に犯し、恬として愧ずるを知らざるものなきにあらず。文明進歩して罪を野蠻人に得る者というべし。學術技芸果たして何の効あるべきや。我輩は我が社会を維持して国を立てんとするに、むしろ無学無術の人と事を共にするも、有智の妖怪と共にするを欲せざる者なり。そもそも我が日本国の独立して既に数千年の社会を維持し、また今後万

々歳に伝えんとするは、自<sup>おの</sup>ずからその然<sup>しか</sup>る所以<sup>ゆえん</sup>の元素あるが故なり。即ち社会の公德にして、その公德の本<sup>もと</sup>は家の私徳にあり。何者の軽薄児か、敢<sup>あ</sup>えて文明を口に藉<sup>か</sup>りて立国の大<sup>たい</sup>本<sup>ほん</sup>を害せんとするや。我が道德は数千年に由来してその根本固し。豈<sup>あに</sup>汝らをして容易にこれを動揺せしめんや。天下広し、我輩徳友に乏しからず。常に汝らの挙動に注目して一<sup>いち</sup>毫<sup>こう</sup>も仮<sup>か</sup>さず、鼓<sup>つづみ</sup>を鳴らしてその罪を責めんと欲する者なり。

人間<sup>しよせい</sup>処<sup>けんり</sup>世<sup>けんり</sup>の権理に公私の区別ありて、先ず私権を全うして然る後、公権の談に及ぶべしとの次第は、かつて『時事新報』の紙上にも記したることなるが（去年十月六日より同十二日までの

『時事新報』「私権論」）、そもそもこの私権の思想の発生する

事情は種々様々なれども、さいだいいち最第一の原因は、本人の自ら信じ自ら重んずるの心にあつて存するものと知るべし。即ち我が徳義を円満無欠の位に定め、一身のたつと尊きこと玉ぎよくへき璧もただならず、これを犯さるるは、あたかも夜光の璧たまに瑕瑾きずを生ずるが如き心地して、片時も注意をおこた怠ることなく、えいびん穎敏まもに自ら衛りて、始めて私権を全うする場合に至るべし。されば今、私権を保護するは全く法律上の事にして、徳義には縁なきものの如くに見ゆれども、元これを保護せんとするの思想は、円満無欠なる我が身に疵きずつくるを嫌うの一念より生ずるものなれば、いやしくも内に自ら省みてやま疚しきものあるにおいては、その思想の発達、決して十分なるを得うべからず。いかん如何となれば本人は元来疵きず持つ身にして、その氣

既に餒<sup>す</sup>えたるが故に、大節に臨んで屈することなきを得ず。即ち人心の働きの定則として、一方に本心を枉<sup>ま</sup>げて他の一方にこれを伸ばすの道理あらざればなり。私徳を修めて身を潔<sup>けつせい</sup>清<sup>くわらい</sup>の位に置くと、私権を張りて節を屈せざると、二者その趣を殊<sup>こと</sup>にするが如くなれども、根本の元素は同一にして、私徳私権<sup>あいかん</sup>相関し、徳は権の質<sup>しつ</sup>なりというべし。試みにこれを歴史に徴するに、義氣<sup>りんぜん</sup>凜然として威武も屈する能<sup>あた</sup>わず富貴も誘<sup>いざ</sup>う能わず、自ら私権を保護して鉄石の如くなる士人は、その家に居<sup>お</sup>るや必ず優しくして情に厚き人物ならざるはなし。即ち戸外の義士は家内の好主人たるの實<sup>じつ</sup>を見るべし。いかなる場合にも放<sup>ほうとう</sup>蕩無情、家を知らざるの輕薄児が、能<sup>よ</sup>く私権のために節を守りて義を全うしたるの例は、我輩

の未だ聞かざる所なり。

窃ひそかに世情を視みるに、近来は政治の議論漸ようく喧がましくして、社会の公権即ち政権の受授につき、これを守らんとする者もまた取らんとする者も、頻しきりに熱心して相争うが如くなるは至極当然の次第にして、文明の国民たる者は国政に關すべき権利あるが故に、これを争うも可なりといえども、前にいえる如く、この公共の政権を守り、またこれを得んとするには、先ず一身の私権を固くすること肝要にして、その私権を固くせんとするには私徳を脩おさめざるべからざるの道理も、既に明白なりとして、さて今日の実際において、我が日本国の政治家はいかなる種族の人にして、その私徳の位くらしいは如何いかと尋ぬるに、外面より見て人品みなはいずれも皆中等以

上の種族なれども、特別に有徳の君子のみにあらず。その智識聞  
 見は、あるいは西洋流の文明に近き人あるも、徳教の一段に至り  
 特に出色の美なきは、我輩の遺憾に堪えざる所なり。文明の士人  
しんしょう  
 心匠巧みにして、自家の便利のためには、時に文林儒流の磊  
いらく  
 落を学び、輕躁浮薄、法外なる不品行を犯しながら、君子は  
さいこう  
 細行を顧みずなど揚言して、以てその不品行を瞞まん着ちやくするの  
 口実に用いんとする者なきにあらず。けだし支那流にいう磊落と  
 はいかなる意味か、その吟味はしばらく擱さしおき、今日の処にては、  
 磊落と不品行と、字を異にして義を同じうし、磊々らいらいらくらく落々らくらく  
 は政治家の徳義なりとて、長老その例を示して少壮これに倣ならい、  
 遂に政治社会一般の風を成し、不品行は人の体面を汚けがすに足らざ

るのみならず、最も磊落、最も不品行にして始めて能く<sup>よ</sup>他を圧倒するに足るものの如し。

そもそも内行の不取締は法律上における破廉恥<sup>はれんち</sup>などとは趣<sup>こと</sup>を異にして、直ちに咎<sup>とが</sup>むべき性質のものにあらず。また人の口にし耳にするを好まざる所のものなれば、ややもすれば不知不識<sup>しらずしらず</sup>の際にその習俗を成しやすく、一世を過ぎ二世を<sup>ふ</sup>経るのその間には、習俗遂にあたかもその時代の人の性となり、また挽回すべからざるに至るべし。往古、我が王朝の次第に衰勢に傾きたるも、在朝の群臣、その内行を慎まずして私徳を軽んじ、内にこれを軽んじて外に公德の大義を忘れ、その終局は一身の私権、戸外の公権をも併<sup>あわ</sup>せて失い尽したるものならんのみ。されば今日の政治家が政事

に熱心するも、単に自身一時の富貴のためにあらず、天下後世の  
 ために、国民の私権を張り公権を伸ばすの道を開かんとするの趣  
 意にこそあれば、後の世の政治社会に宜よろしからざる先例を遺のこすは、  
 必ず不本意なることならん。もしもその本心に問うて慊こころよからざる  
 ことあらば、仮令たとえ法律上に問うものなきも、何ぞ自ら省みて、  
 これを今日に慎まごまざるや。金きんぎよく 玉もただならざる貴重の身にし  
 て自らこれを汚けがし、一点の汚穢おわいは終身の弱点となり、もはや諸もろも  
 々ろの私徳に注意するの穎えいびん敏を失い、あたかも精神の痲痺まひを催  
 してまた私権を衛まもるの氣力もなく、漫然まんぜん世と推移おしうつりて、道理  
 上よりいえば人事の末とも名づくべき政事政談に熱するが如き、  
 我輩は失敬ながら本もとを知らずして末すえに走るの人と評せざるを得ざ

るなり。

然かのみならず国の徳義の一般に上進すると共に、品行論はいよいよ穎敏えいびんとなり、天下後世の談にあらずして、いやしくも不品行者とあれば今日の社会に許されざるを常とす。試みに見るべし、有名なる英国の政治家チャールス・ヂルク氏は、誠に疑わしき艶罪えんざい（ある人の説く所に扱よれば全く無根の冤えんなりともいう）を以て政治社会を擯しりぞけられたり。我輩はもとより氏わたくしに私の縁あらざれば、その人の幸不幸についても深く喜憂するにはあらざれども、ただこの一事を見て、英国政治社会一般の徳風を窺うかがい知るのみ。即ち、かの政治社会は潔清無垢けっせいむくにして、一点の汚痕おこんを留めざるものというべし。斯かくありてこそ一国の政治社会とも名づく

べけれ。その士氣の凜然<sup>りんぜん</sup>として、私に屈せず公に枉<sup>こう</sup>げず、私徳私権、公德公権、内に脩<sup>おさ</sup>まりて外に発し、内国の秩序、齋然<sup>せいぜん</sup>巍然<sup>ゑいぜん</sup>として、その余光を四方に耀<sup>かがや</sup>かすも決して偶然にあらず。我輩は、我が政治社会の徳義をして先ず英国の如くならしめ、然る後に實際の政事政談に及ばんことを欲するものなり。

外国と交際を開きて独立国の体面を張らんとするには、虚実兩様の尽力なかるべからず。殖産工商の事を勉めて富国の資を大にし、学問教育の道を盛んにして人文の光を明らかにし、海陸軍の力を足して護国の備えを厚うするが如き、實際直接の要用なれども、内外人民の交際は甚だ繁忙多端にして、外国人が我が日本国の事情を詳<sup>つまび</sup>らかにせんとするは、容易なることにあらざるが故に、

彼らをして我が真面目しんめんもくを知らしめんとするには、事の細大に論なく、仮令たとえ無用に属する外見の虚飾にても、先ずその形を示して我を知るの道を開くこと甚だ緊要なりとす。即ち我が国衣食住の有様は云々しかじかにして習俗宗教は斯かくの如しなどと、これを示しこれを語りて、時としてはことさらにその外面を装よそおうて体裁を張るが如き、これなり。例えば今日の実際において、吾人の家に外国人の来るきたれば、先ずこれを珍客として様々に待遇の備えを設け、とにかくに見苦しからぬようにと心配するは人情の常なり。また、これを大にして都鄙とひの道路橋梁、公共の建築等に、時としては実用のほかに外見を飾るものなきにあらざ。あるいは近来東京などにて交際のいよいよ盛んにして、遂に豪奢ごうしゃ分外の譏そしりを得るま

までに至りしも、幾分か外国人に対して体裁云々の意味を含むこと  
 ならん。一概にこれを評すれば無益の虚飾なるに似たれども、他  
 人をして我が真実を知らしむるは甚だ易やすからざるが故に、先ず虚きよ  
 より導きて実じつに入らしむる方便なりといえ、強あながち咎とがむべきにも  
 あらず。その虚実、要不要の論はしばらく擱さしおき、我が日本人が  
 外国交際を重んじてこれを等閑とうかんに附せず、我が力のあらん限りを  
 尽して、以て自国の体面を張らんとするの精神は誠に明白にして、  
 その愛国の衷ちゆうじよう情、実際の事跡に現われたるものというべし。

然るに、我輩が年来の所見を以ていかように判断せんとするも  
 説せつを得ざるその次第は、我が国人が斯かくまでに力を尽して外交を  
 重んじ、ただに事実はかに国の富強文明を謀はかるのみならず、外面の体

裁虚飾に至るまでも、専ら西洋流の文明開化に倣わんとして怠ることなく、これを欣慕して二念なき精神にてありながら、独りその内行の問題に至りては、全く開明の主義を度外に放棄して、純然たる亜細亞洲の旧慣に従い、居然自得して眼中また西洋なきが如くなるの一事なり。元来西洋の人は我が日本の事情に暗くして、ややもすれば不都合千万なる謬見を抱く者少なからず。就中彼らは耶蘇教の人なるが故に、己れの宗旨に同じからざる者を見れば、千百の吟味詮索は差置き、一概にこれを外教人と称して、何となく嫌悪の情を含み、これがために双方の交情を妨ぐること多きは、誠に残念なる次第にして、我輩は常にその弁明に怠らず。日本国民既に耶蘇教に入りたる者あり、なお未

だ入らざる者ありといえども、その入ると入らざるとはただ宗教上の儀式にして、日本帝国決して不徳の国にあらず、耶蘇教国<sup>ひと</sup>独り徳国にあらず、いやしくも数千年の国を成して人事の秩序を明らかにし、以て東海に独立したるものにして、立国<sup>りつこく</sup>根本の道徳なくして叶<sup>かな</sup>うべきや、耶蘇の教義<sup>は</sup>果たして美にして立国に要用なりとならば、我が日本国には耶蘇の名のほかには無名の耶蘇教民あることならんなどと、百方に言葉を尽して弁論すれば、また自<sup>おの</sup>ずからその意を解して釈然たる者なきにあらざれども、その談論時として男女関係の事に及び、日本の男子は多妻を許されてこれを咎<sup>とが</sup>むるものなく、ただに法律に問わざるのみならず習俗の禁ぜざる所なれば、社会の上流良家の主人と称する者にてても、公然この

醜行を犯して愧はずるを知らず、即ち人生居家きよかの大倫を紊みだりたるものにして、随したがつて生ずる所の悪事は枚挙いとまに遑いとまあらず、その余波よは引いて婚姻の不取締となり、容易に結婚して容易に離婚するの原因となり、親子の不和となり、兄弟の喧嘩となり、これを要するに日本国には未だ真実の家族なきものというも可なり、家族あらざれば国もまたあるべからず、日本は未だ国を成さざるものなりなど、口を極めて攻撃せらるるときは、我輩も心の内には外国人のびゆうけん見見妄ぼうまん漫漫を知らざるにあらず、我が徳風か斯くまでに壞やぶれたるにあらず、我が家族しつかい悉悉皆然るにあらず、外人の眼の達せざる所に道德あり家族あり、その美風は西洋の文明国人をしてかえつて赤面せしむるもの少なからず、以て家を治め以て社会を維持す

るその事情は云々うんぬん、その証拠は云々と語らんとすれども、何分にも彼らが今日の実証を挙げて正面より攻撃するその論鋒ろんぼうに向かつては、残念ながら一着を譲らざるを得ず。遂に西洋人に仮かすに我を軽侮するの資しを以てして、彼らをして我に對して同等の觀をなさしめざるに至りしは、千歳の遺憾、無窮むきゆうに忘るべからざる所のものなり。

然しかり而して日本国中その責せめに任ずる者は誰たぞや、内行ないこうを慎まざる輕薄男子あるのみ。この一点より考うれば、外国人の見る目如何いかんなどとして、その來訪のときに家内の体裁を取り繕い、あるいは外にして都鄙とひの外觀を飾り、または交際の法に華美を装うが如き、誠に無益の沙汰にして、輕侮を來きたす所以ゆえんの大本おおもとをば擱さしおき、徒ただ

に末に走りて勞するものといふべきのみ。これを喩えば、大慶高樓の盛宴に山海の珍味を列ね、酒池肉林の豪、糸竹管絃の興、善尽し美尽して客を饗応するその中に、主人は独り袒裼裸体なるが如し。客たる者は礼の厚きを以てこの家に重きを置くべきや。饗きようれい礼は鄭重ていちようにして謝すべきに似たれども、何分にも主人の身こそ氣の毒なる有様なれば、賓主ひんしゆの礼儀において陽に發言せざるも、陰に冷笑して輕侮の念を生ずることならん。勞して功なく費やして益なきものといふべし。されば今我が日本国が文明の諸外国に対して、その交際の公私に論なく、ややもすれば意の如くならざるは、原因のある所、一にして足らずといえども、我が男子が徳義上に輕侮を蒙るの一事は、その原因中の大箇条だいかじような

るが故に、いやしくもこれに心付きたる者は、片時へんじも猶予せずしてその過ちを改めざるべからず。今の世界に居て人生誰か自国を愛せざる者あらんや。国のためとあれば荊いばらに坐し胆たんを嘗なむるも憚はばからざるは人情の常なり。内行を慎むが如き、非常の辛苦にあらず。在ざい昔せきはこれを戒むるの趣意、単にその人の一身にありしことなれども、今は則すなわち一国の榮辱に關して、更に重大の事とはなりたり。身を思い国を思う者は、深く自ら省みる所なかるべからざるなり。

「日本男子論」の一編、その言既ことに長く、真正面より男子の品行を責めて一毫いちごうも仮かさず、水も洩もらさぬほどに論じ詰めたることなれば、世間無数疵きず持つ身の男子はあたかも弱点を襲われて遁のがる

るに路みちなく、ただその心中おもえに謂いらく、内行うちぎやうの不取締ふとくしへい、醜みにくといわ  
 れば醜みにくなれども、詐偽さぎ・破廉恥はれんちにはあらず、また我が一身いつしんの有様  
 は自おのずから人に語るべからざる都合ごうごもあることなるに、斯かくまで  
 に酷こくげん言げんせずともなどといささか不平ふへいもありながら、さりとして何  
 と答弁こたへの辞ことばもなくして甚こだ苦くしきことなるべし。我輩われらこれを知ら  
 ざるにあらずといえども、およそ今の日本人にほんじんとして、現在の愉よろこ  
 快かい、後世子孫ごせしよんの幸福しあふは、何を以もつて最さいとするやと尋たずねたらば、独立  
 の体面たいめんを維持維持して日本国にほんこくの栄名えいめいを不朽こくに伝つたうるのほかなかるべし。  
 而しかうしてこの体面たいめんと栄名えいめいとを張はるにいささかにても益えきすべきものは  
 これを採とり、害がいすべきものはこれを除のぞかんとするもまた、日本国にほんこく  
 民たみの身みにおいてまさに然しかるべき至情しじやうなるべし。されば絶あづかり対てい

の理論においては、人間世界の善悪邪正をいかなるものぞと論究して未だ定まらざるほどの次第なれば、まして男女の内行に關し、一夫一婦法と多妻多男法と、いずれか正、いずれか邪なる、固もとより明めい断だんし難しといえども、開かい闢びやく以来の実験に抛より、また今日の文明説に従うときは、一家の私しのため一国の公こうのために、多妻多男法は一夫一婦法の善よきに若しかず。かつ今日の世界は西洋文明の風に吹かれてこれに抵抗すべからざるの時勢なれば、文明の風に多妻多男を嫌忌けんきして、そのこれを嫌忌するの成せい跡せきは甚だ美にして、今日の人の家を成し国を立つるに最も適当し、これに反するものは必ず害こうむを被りて免るべからざること、既に明らかなれば、理論上の正邪はともかくも、一国人民として自国自家のため

に、決して軽んずべからざるの大義にして、即ち我輩がいかなる事情に逢うも、断乎として一毫をも仮さざる由縁なり。

またあるいは説を作り、西洋文明の人と称する者にて、その男女の内行決して潔清なるにあらず、表面はともかくも、裏面に廻りて内部を視察すれば、醜に堪えざるもの多し、何ぞ必ずしも独り日本人を咎むるに足らんなどいう者なきにあらず。これは我が国の上流、殊に西洋家と称する一類の中に行わるる言なれども、全く無力の遁辞口実たるに過ぎず。そもそも人生の氣力を平均すれば至つて弱き者にして、ややもすれば艱難に敵して敗北すること少なからざるの常なり。然るに内行を潔清に維持して俯仰慚ずる所なからんとするは、氣力乏しき人にとりて随分一難

事とも称すべきものなるが故に、西洋の男女独りほくせき木石にあらず  
また独り強者にあらず、俗にいう穴あなさが探しの筆法を以てその社会  
の陰いんしよ処を摘発するにおいては、千百の醜行醜聞、枚挙いとまに違あ  
ず。我輩は親しくその国人の言に聞きたることもあり、またその  
著書・新聞紙上に見たることもありて、誠に珍しからずといえど  
も、然りといえども日本男子はこの西洋社会の醜行醜聞を見聞し  
て如何いかんの感をなすや。これを醜なりとするか、はた美なりとする  
か。我輩の聞かんと欲する所は、ただその醜美の判断如何いかんの一点  
にあるのみ。

日本男子鉄てつめんび面皮なるも、その眼がんに映じて醜なるものは醜にし  
て、美なるものは美なるべし。既に醜美の判断を得たり、然らば

則ち何ぞその醜を去つて美に就かざるや。本来醜美は自身の内に  
 存するものにして、毫末も他に關係あるべからず。いやしくも  
 我が一身の内に美ならんか、身外満目の醜美は以て我が美を  
 軽重するに足らず。あるいはこれに反して我が身に一点の醜  
 を包蔵せんか、満天下に無限の醜を放つものもあるも、その醜は以  
 て我が醜を浄むるに足らず、また恕するに足らず。されば文明な  
 る西洋諸国の社会にもなお醜行の盛んなるを見聞したらば、幸い  
 に取つて以て自省の材料にこそ供すべけれ、いかに自儘なる説を  
 作るも、他の悪事を見て自家の悪事を恕するの口実に用いんとす  
 るが如きは、我輩の断じて許さざる所なり。近く比喩を以てこれ  
 を示さんに、不品行によりて徳を害するも、虎列刺毒に触れて身

を害するも、その害は同様なるべし。然るに今虎列刺コレラの流行に際して我が保身の法を如何いかんするや。天下の人皆病毒みなに感ず、流行病は天下の流行にして、西洋諸国また然りとのことなれば、もはや我が身も自ら顧みるに違いとまあらず、共にその毒に伝染して広く世界の人と病苦死生を与ともにすべしとて、自暴自棄する者あるべきや。我輩未だその人を見ざるのみならず、その流行のいよいよ盛んなるに従つて自ら戒むるの法もいよいよ綿密にして、謹慎に謹慎を加うるは、世界古今人情の常なり。人生の身体とその精神と、いずれをも軽しとしました重しとすべからざるはいうまでもなきことにして、今内行ないこうの不取締は、人倫の大たい本ほんを破りて先ず精神を腐敗せしむるものなり。身体を犯すの病毒はこれを恐るること非

常にして、精神を腐敗せしむるの不品行は、世間に同行者の多きがためにとて自らこれを犯して罪を免れんとす。無稽むけいもまた甚だしというべし。故にかの西洋家流が欧米の著書・新聞紙など読みてその陰所の醜を探り、ややもすればこれを公言して、以て冥めいめ々いの間に自家の醜を瞞まんちやく着やくせんとするが如き工風くふうを運めぐらすも、到底とうてい我輩の筆鋒を遁のがるるに路みちなきものと知るべし。

日本男子の内行不取締は、その実じつにおいて既に厭いとうべきもの少なからざるなおその上に、古来習俗の久しき、醜を醜とせずして愧はずるを知らざるのみならず、甚だしきに至りて、その狼藉ろうぜき無状じようの挙動を目して磊落らいらくと称し、赤面の中に自おのずから得意の意味を含んで、世間の人もこれを許して問わず、上流社会にてはそ

の人を風流才子と名づけて、人物に一段の趣おもむきを添えたるが如くに見え、下等の民間においても、色は男の働きなどいう通語を生じて、かつて憚はばかる所なきは、その由来、けだし一朝一夕のことにあらず。我が王朝文弱の時代にその風を成し、玉の盃底なきが如しなどの語は、今に至るまで人口に膾炙かいしやする所にして、爾後武家の世にあつては、戸外兵馬の事に忙せわしくして内を修むるに違いとまなく、下つて徳川の治世に儒教大いに興りたれども、支那の流儀にして内行の正邪は深く咎とがめざるのみならず、文化文政の頃に至りては治世の極度、儒もまた浮文ふぶんに流れて洒落放胆しやらくを事とし、殊に三都の如きはその最も甚だしきものにして、儒者文人の叢淵そうえん即ち不品行家の巢窟そうくつとも名づくべき悪風を成し、遂に徳川を終

わりて明治の新世界に変じたれども、いわゆる洒落放胆の氣風は今なお存して止やまず、かの洋学者流の如き、その学ぶ所の事柄は全く儒林の外にして、仮たと令え西洋の宗教道德門に入らざるも、その国人に接し、その言を聴き、その書を読み、その風俗を視察するとき、事の内実はともかくも、その表面のみにても、これと日本の事態に比して大いに異なる所あるを發明し、大いに悟りて自ら新たにし、儒流洒しやらく落の不品行を脱却して紳士の正せいに歸すべきはずなるに、言行一いっさい切西洋流なるにもかかわらず、内行の一点に至りては純然たる旧日本人の本色を失わざるもの多し。けだし社会一般の習俗に制せられて、醜しうを醜とするの明めいを失うたるものにして、あるいはこれを評し有心ゆうしんこぞう故造の罪にあらず、無心に

悪を犯すの愚というも可ならん。この点より見れば悪むべきにあらず、むしろ憐れむべきのみ。

前年外国よりある貴賓の来遊したるとき、東京の紳士と称する連中が頻りに周旋奔走して、礼遇至らざる所なきその饗応の一として、府下の芸妓を集め、大いに歌舞を催して一覽に供し、来賓も興に入りて満足したりとの事なりしが、実をいえばその芸妓なる者は大抵不倫の女子にして、歌舞の芸を演ずるの傍ら、往々言うべからざる醜行に身を汚し、ほとんど娼妓に等しき輩なれば、固より貴人の前に面すべき身分にあらず。西洋諸国の上流社会にてこの種の女子を賤しむは勿論、我が日本国においても、仮に封建時代の諸侯を饗するに今日の如き芸妓の歌舞を以てせんとした

らば、必ず不都合を訴うることならん。されば、かの貴賓もその芸妓の何ものたるを知らざりしこそ幸いなれ、もしも内実の事情を聞くこともありしならんには、饗応の満足に引替えて、失敬無状を憤りしことなるべし。これとてもさきの紳士連中は無礼と知りて行うたるにあらず、その平生において、男女品行上のことをば至つて手輕に心得、ただ芸妓の容姿を悦よろこび、美なること花の如しなどとして、徳義上の死物たる醜行不倫の女子も、潔清上品なる良家の令嬢も大同小異の觀をなして、さては右の如き大間違いに陥りたるものならんのみ。我輩は直ちにその人を咎とがめずして、我が習俗の不取締にして人心の穎えい敏びんならざるを歎息する者なり。これを要するに、今の紳士も学者も不学者も、全体の言行の高尚

なるにかかわらず、品行の一点においては、不釣合に下等なる者多くして、俗言これを評すれば、御座ござに出されぬ下郎げろうと称して可なるが如し。花柳かりゆうの間に奔々ほんほんして青楼せいろうの酒に酔い、別荘し妾ようたくの会宴でいりに出入の芸妓を召すが如きは通常の人事にして、甚だしきは大切なる用談も、酒を飲み妓ぎに戯るるの傍らかたわにあらざれば、談者相互の歡心を結ぶに由よしなしという。醜極まりて奇と称すべし。

数百年來の習俗なれば、これを酷とがに咎むるは無益の談に似たれども、今の日本は、これ日本国中の日本にあらずして、世界万国に対する文明世界中の日本なれば、いやしくも日本の榮譽を重んずる士人においては、少しく心する所のものなかるべからず。試

みに一例を挙げて士人に問わん。君らがいわゆる盛会に例の如く  
 妓を聘し酒を飲み得々談笑するときは勿論、時としては親戚・  
 朋友・男女団欒たる内宴の席においても、一座少しく興に入ると  
 き、盃盤を狼藉ならしむる者は、君らにあらざして誰ぞや。  
 その狼藉はなお可なり、酒席の一興、かえつて面白しとして恕す  
 べしといえども、座中ややもすれば三々五々の群を成して、その  
 談、花街柳巷の事に及ぶが如きは聞くに堪えず。そもそもそ  
 の花柳の談を喋々々々するは、何を談じ何を笑い、何  
 を問い何を答うるや。別品といひ色男といひ、愉快といひ失策  
 といひが如き、様々の怪語醜言を交え用いて、いかなる談話を成  
 すや。酔狂喧嘩の殺風景なる、固より厭うべしといえども、花柳

談の陰醜なるは醉狂の比にあらざるなり。もしも外国人の中に、日本語に通ずること最も巧みにして、談話の意味は勿論、その語氣の微妙なる部分までも穎敏えいびんに解し得る者あるか、または日本人にして外国語を能くし、いかなる日本語にてもその真面目しんめんもくを外国語に写して毫も誤らざる者ありて、君らの談話を一より十に至るまで遺のこる所なく通弁しまた翻訳して、西洋文明国の中人以上、紳士貴女をしてこれを聴かしめ、またその訳文を読ましめたらば、かの士女は果たして如何の評を下すべきや。一切の事情をば問わずして、ただ喫驚きつきょうの余りに、日本の紳士は下郎なりと放言し去ることならん。君らは斯かかる評論を被りて、果たして愧はずる所なきか。

西洋諸国の上流紳士学者の集會に談笑自在なるも、果たして君らの如き醜語を放つて憚はばからざるものあるか、我輩の未だ知らざる所なり。けだし文明の社会にはかつて聞かざる所の醜語にてありながら、君らが常にこれを語りて憚る所なきは、日本の事は外人の知らざる所なりとして、強いて自ら安んずることならんなれども、前節にいえる如く、今日の日本は世界に対するの日本なり、いやしくも国を国として榮辱の所在を知るものは、君らの言行について不平なきを得ざるなり。また些ささい細の事なれども手近く一例を示さんに、『時事新報』紙上に折々英語を記して訳文を添へたる西洋の落語また滑稽こっけいだん談の如きものは読者の知る所ならん。この文は西洋の新聞紙等より抜きたるものにして、必ずしもその記

事の醜美を撰えらぶにあらざれば、時々法外千万なる漫語放言もあれども、人生の内行に関するの醜談、即ち俗にいう下掛しもがかりのこととしては、かつて一言もこれを見ず。その然る所以ゆえんは、訳者が心を用いて特に避けたるにあらざして、原書中を求めて斯かかる醜談に見当たらずればなり。今仮かりに西洋の原書を離れて、これに易かうるに日本流の落語滑稽を以てせんとして、その種類を集めたらばいかなるものを得うべきや。談柄だんぺい必ず肉体の区域に入りて、見苦しく聞き苦しきものは十中の七、八なるべし。畢ひつきよう竟きやう我が人文のお未だ鄙陋ひろうを免れざるの証として見るべきものなり。然しかり而しこうしてこの日本流の落語なりまた滑稽談なり、特に下等の民間に行わるる鄙陋ひろうなればなお恕じよすべしといえども、堂々たる上流の士君子と

称する輩が、自ら鄙陋を犯してまた鄙陋を語り、醜臭を世界に放つが如きは、国民の標準たる士君子の徳義上において、遁のがるべからざるの罪というべし。

本編の趣旨は、初段の冒頭にもいえる如く、日本男児の品行を正し、その高きに過ぐる頭かしらを取つて押さえ、男女なんによ両性の地位に平均を得せしめんとするの目的を以て論ろん緒しよを開き、人間道德の根本は夫婦の間にあり、世間の道德論者が自愛博愛などとしてその得失を論ずる者あれども、本来私徳公德の區別を知らざるものなれば、脩しゆう徳とくに前後緩急を誤ること多し、私徳は公德の母にして、その私徳の根本は夫婦家いゑに居おるの大倫にあり、然しかり而して古来世の中の実際において、常にこの大倫を破る者は男子にして、

我が日本国の如きはその最も甚だしきものなれば、多妻法、断じて許すべからず、斯<sup>かか</sup>る醜行を犯す者は、一家の不幸を醸<sup>かも</sup>して、禍<sup>わざわい</sup>を後世子孫に遺すのみならず、内行不取締は醜聞を世界万国に放つものにして、自国の名声を害するの罪人なり云々とて、筆鋒の向かう所は専<sup>もつぱ</sup>ら男子にして、婦人の地位如何<sup>いかに</sup>に論及したることなし。そもそも我が国の婦人を男子に比較するときは、全く地位を殊<sup>こと</sup>にし、居家内実<sup>きよか</sup>の権力はともかくも、戸外交際の事に至りてはすべて男子のために専らにせられて、婦人は有れども無きに異ならず。特に男子が多妻の醜行を犯して婦人の情を痛ましむるが如き、ただに自愛に偏するのみならず私曲私慾の最も甚だしきものにして、更に一言の弁論あるべからず。我輩は常に世の道德論者

の言を聞き、論者が特にこの大切なる一点をば輕々看過してあ  
たかも不問に附する者多きを見て窃かに怪しむのみか、その無識  
を冷笑するほどの次第なれば、大いに婦人の地位を推してこれを  
高処に進め、以て男子に拮抗せしめんとするの考案なきにあら  
ず。徹頭徹尾、今の婦人と今の男子とを相對照して今の關係にあ  
らしむるは、我輩のあくまでも悦ばざる所なれども、眼を転じて  
一方より考うれば、本来物の高低・強弱・大小等は相對の關係に  
して絶対の義にあらず。高きものあればこそ低きものもあり、強  
大あればこそ小弱もあり。故に今、婦人の地位を低しというも、  
男子の地位を引下げて併行するに至らしむれば、男女の権力平  
等なりというべし。あるいは婦人は今のままにして、男子の地位

をして一層の下に就かしむれば、女權特に高しというべし。これ即ち我輩が独り男子を目的にして論鋒を差向けたる所以なり。

然るにここに支那学の古流に従つて、女子のために特に定めたる教義あり。その義は諸書に記して多き中について、我が国普通の書を『女大学』と称し、女教の大要を陳べたるものなるが、書中往々不都合にして解すべからざるものなきにあらず。例えば女子の天性を男子よりも劣るものと認め、女は陰性なり、陰は暗しなど、漠然たる精神論を根本にして説を立つるが如きは、妄漫無稽と称すべきなれども、その他は大抵皆女子を戒めたる言の濃厚なるものに過ぎず。我輩がかつて戯れに古人の教えを評し、町家の売物に懸直あるが如しといひしもこの辺の意味にして、

『女大学』の濃厚苛刻かこくなる文面を正面より受取り、その極端を行わんとするは、とても實際に叶かなわざることなれども、さりとして教えの言として見れば道理に差さしつかえ支あるべからず、ただ独り女子のみを責むることなく、男子をもこの教えの範囲内に入れて慎む所あらしむれば、その主義甚はなはだ美なるもの多し。

例えばその文の大意に嫉妬の心あるべからずというも、片落かたおちに婦人のみを責むればこそ不都合なれども、男女双方の心得としては争うべからざるの格言なるべし。また姦かしましく多言たげんするなかれ、漫みだりに外出するなかれというも、男女共にその程度を過ぐるは誉ほむべきことにあらず。また巫覡ふけんに迷うべからず、衣服分限ふんげんに従うべし、年少わかきとき男子と猥なれ猥れしくすべからず云々は最も可

なり。また夫を主人として敬うべしというのは、女子より言を立てて一方に偏するが故に不都合なるのみ。けだし主人とするとは敬礼の極度を表したるものなれば、男子の方より婦人に対し、夫婦の間は必ず敬礼を尽し、ただにその内君を親愛するのみならず、時としては君に事うるの礼を以てこれを接すべしといえ、夫を主人とするの語も、また差支なかるべし。されば我輩、婦人の地位を高くするの議論は満腹溢るるが如くにして、自ずからその方便もなきにあらずといえども、これは他日に譲り、今日の目的は今の婦人の地位をばそのままに差置き、『女大学』をも大抵の処まではこれを潰さずして、かえつて男子をしてこの『女大学』の主義に従わしめ、以て男子の品行を糺して双方を併行の点に維

持せんとするにあるものなり。

今その然る所以ゆえんの理由を述べんに、婦人の地位の低きとは、男子に対して低きことなれば、これを引上げて高き処に置かんとするに当たり、第一着に心頭に浮ぶものは、とにかくに、今の婦人をして今の男子の如くならしめんとするの思想なるべし。然り而しかしこうしてその男子の如くなるや、知識氣力の深淺強弱如何いかんの辺に止まとどり、専ら精神を練るの教えを主として、当局の婦人においても、その範圍を脱せざれば甚だ佳しといえども、文明の事は有形の門より入るもの多きの例なれば、婦人の教育についてもその形を先にし、先ず衣裳を改めて文明の風を装い、交際を開いて文明の盛事を学び、只ひたすら管外国婦人の所業に倣なうて活澆かっぱつを氣取り、外面

の虚飾を張りてかえつて裏面の實を忘れ、活潑は漸くようや不作法に變じ、虚飾は遂に家計を寒からしめ、未だ西洋文明の精神を得ずして、早く既に自家遺伝の美德美風を失うことなきを期すべからず。これらの弊害は事物の新旧交代の際に多少免るべからざるものとしてこれを忍ぶも、ここに忍ぶべからざるは、その弊害の極度に至り、今の婦人が男子の挙動に倣ならわんとして、今の日本男子の品行を学ぶが如きあらばこれを如何いかんすべきや。日本人の品行美ならずといえども、なお今日までにこれを維持してその醜おほを蔽い、時として潔けつせい清義烈せいげれつの光を放つて我が社会の榮譽を地に落つることなからしめたるものは何ぞや。ただ良家の婦人女子あるのみ。現に今日にあつても私徳品行の一点に至り、我が日本の婦人と西

洋諸国の婦人と相對するときは、我に愧はずる所なきのみならず、往々上じょうじよう乗くらに位して、かの婦人の能よくせざる所を能くし、その堪えざる所に堪え、彼をして慚死ざんしせしむるものさえ少なからず。内外人の共に許す所にして、即ち我が大日本の国光として誇るべきものなり。もしも年来日本男子をしてその醜行ほしいままを恣にせしめて、一方に良家婦徳の凜りんぜん然たるものなからしめなば、我が社会はほとんど暗黒世界たるべきはずなるに、幸いにしてその然しからざるは、これを良婦人の賜たまものといわざるを得ず。

然るに今日において、未だ男子の奔逸ほんいつを縛ばくするの繩は得ずして、先ずこの良家の婦女子を誘いざのうて有形の文明に入らしめんとす、果たして危険なかるべきや。居きよは志しを移すという。婦女子の精神

未だ堅固ならざる者を率いて有形の文明に導くは、その居きよを変ず  
 るものなり。その居既すでに變じてその志しはいかに移るべきや。近く  
 諭たとえを取り、今日の婦人女子をして、その良りようじん人父兄の品行を  
 学ぶことあらしめたらばこれを如何いかんせん。試みに男子の胸裡きょうりに  
 その次第の凶面えがを画き、我が妻女がまさしく我ならに倣い、我が花柳  
 に耽ふけると同時に彼らは緑陰に戯れ、昨夜自分は深更しんこう家に歸りて  
 面めん目ぼくなかりしが、今夜は妻女何処いずくに行きしや、その場所さえ分  
 明ならずなどの奇談もあるべしと想像したらば、さすがに磊落らいらく  
 なる男子も慚愧ざんきに堪えざるのみならず、これは世教せいきょうのために  
 大變なりとて、自ら悚然しやうぜんたることならん。然るに婦女子の志  
 の有形無心の文明に誘いざなわれて漸ようやく活潑に移るの最中、あるいはこ

の想像画をして実ならしむるなきを期すべからず、恐るべきにあらずや。男子の不品行は既に日本国の禍源たり、これに加うるに女子の不品行を以てす、国のために不幸を二重にするものというべし。男子社会の不品行にして忌憚きたんするなきその有様は、火の方まさに燃ゆるが如し。徳教の急務は百事を抛なげうち先ずこの火を消すにあるのみ。婦人の地位を高尚にするの新案は、あたかも我が国未會みぞ有うの家屋を新築するものにして、我輩固もとより意見を同じうするのみならず、敢えて発起者中の一部分を以て自ら居おる者なれども、満まん目焰もくえん々たる大火の消防に忙せわしくして、なお未だ新築いとまに違まあらず。故に今後は、我輩の筆力のあらん限り、読者と共にこの消防法に従事して、先ず婦人の居きよを安からしめ、漸ようやくその改良に

着手せんと欲するものなり。



# 青空文庫情報

底本：「福沢諭吉家族論集」岩波文庫、岩波書店

1999（平成11）年6月16日第1刷発行

底本の親本：「福沢諭吉選集 第9巻」岩波書店

1981（昭和56）年1月26日第1刷発行

初出：「時事新報」時事新報社

1888（明治21）年1月13日～24日

入力：田中哲郎

校正：びっきゅ

2009年1月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日本男子論

福沢諭吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>